

ジョン・ティモシー・ウィックステード (John Timothy Wixted), “Hitori Ō-Bei-jin gakusha no Higashi Ajia kenkyū: Watakushi no baai” 一欧米人学者の東研究: 私の場合, Tanaka Issei 田仲一成, tr., *Chūgokugo Chūgoku Bungaku Kenkyūshitsu kiyō* (University of Tokyo) 中国語中国文学研究室紀要 12 (Oct. 2009), pp. 1-35.

Also available at:

<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/bitstream/2261/28128/1/cc012009.pdf>

AND <http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/handle/2261/28128>

## 講演録

## 一 欧米人学者の東アジア研究

——私の場合——

ジョン・ティモシー・ウィックステード

最初に私に対する親切なご紹介に御礼を申し上げます。招聘されましたことを、たいへん名誉に存じます。また、このたびの東京訪問、および東大での講演の機会を与えていただいたことにつきまして、財団法人東洋文庫と東京大学中国語中国文学科に対して、深く感謝いたします。また各種の方法で、計画を立て、支援をしてくださったことに関しまして、とくに東洋文庫の田仲一成教授と榎原稔理事長、及び東京大学の戸倉英美教授のご尽力に心より感謝申し上げます。さらに講演を聴きにおいでくださった皆さんにも御礼を申し上げます。

本日の講演にご参集の皆様が、ほとんど中国の専門家であることは承知しておりますが、まず日本関係の問題からはじめることをお許しください。ただこのトピックも結局は中国への関心と部分的に重なり合うことが明らかになるものと存じます。

ところで、欧米で東アジアを研究している学者のほとんどは、私よりもっとはっきりした線引きのできる分野の研究をしています。たとえば宋代史とか、明代儒学とか、江戸時代の小説などというように。本日私は、目下自分が取り組んでいる分野について、輪郭を紹介し、それが過去の研究努力とどのようにつながっているか、について簡単に示唆することにします。

本日の講演のために、参考資料一式を用意しました。どうか、資料Aをご覧ください。まず最初に、私の最近の著書について述べ、次いで最近取り組んでいる4つの研究計画について述べ、最後に初期の研究関心の若干について述べたいと思います。私は、目下、4冊の書物の刊行計画をもっておりま

(2)

す。2冊ずつ、それぞれが日本に顔を向けたものと中国に顔を向けたものです。日本に関するものとしては、『森鷗外の翻訳文学に関する研究』と、『森鷗外の漢詩に関する研究』の2冊です。中国に関するものとしては、六世紀の批評家・鍾嶸とその『詩品』に関する1冊、及び13世紀の詩人・元好問の詩について総合的に紹介する書の2冊です。

しかし、ここでは、最近刊行された著書の紹介から始めることにします。私がアリゾナ州立大学の最後の10年間に授業を開始したものの一つに《古典日本語入門》という教科がありました。現代日本語を3年間履修した学生を対象とする授業でした。教材として、現在入手し得る欧米語教科書のすべてを概観しましたが、いずれにも満足できませんでした。

そこで私は、自分独自の資料を開発することに着手しました。以前自分が個人的に作った教本の強みのいくつかを、この仕事に生かすよう努力し、同時にこれまでの入門書の不満足な点を修正することにも努力しました。教科課程の資料が積み重なるにつれて、事実上、書物を作っていることに気がきました。このため、5年前、大學を引退する際に行った最初の仕事の一つはこの書物の長い序論を完成することでした。それは、係り結び、形容詞、形容動詞、動詞の6種の活用形などについて説明するもので、ほかにこの書物の7種の付録のために、資料の補充を行いました。これは文献資料、特に現在入手可能な欧米語で書かれた古典日本語に関する研究と、欧米語に翻訳された日本古典のテキストについて、豊富な情報を提供するものです。

ここで、この『文語ハンドブック』の2つの特徴をご説明しておきます。資料B(『文語ハンドブック』166-169頁)は、助動詞「たり」についての用例から成っています。「たり」がどのように用いられるか、という簡単な説明のあとに、5種の動詞活用形に対応するそれぞれの用例が3例ずつ示されています。未然形、連用形、終始形、連体形、已然形の5種です。各用例は、日本古典原文とローマ字表記で提示し、いずれも説明の対象となる「たり」に強調記号(赤字または太字)を附しています。同時に引用原典と私による英訳が附されています。第2例をご覧ください。

女の目には見ゆる物から、おとこはある物かとも思（ひ）たらず。  
 (『伊勢物語』 19 ; 123)

[*Onna no me ni wa miyuru monokara, otoko wa aru mono ka to mo  
 omoi***TARAZU.**]

Although he was visible to the woman, he did not think of her as being there.

ついで資料 C (『文語ハンドブック』 271 頁) をご覧ください。簡略な形ではありますが、ここには、本文で挙げた用例の、入手しうる限りの欧米語への翻訳—英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語への翻訳が列挙してあります。『伊勢物語』からとった用例 2 には、私のもの以外に、Harris ハリス、McCullough マツカラ、Vos ヴォス、Renondeau ルノンドー、Schaarschmidt シャールシュミット、Pfizmaier プフィッツマイヤー、Cabezas García カベサス・ガルシア、及び Renondeau/Solomonoff ルノンドーとソロモノフの翻訳があります。

次に、資料 D (『文語ハンドブック』 296-297 頁) をご覧下さい。ここには、今触れた『伊勢物語』の翻訳者に関する文献書誌情報が列挙されています。最初は、英訳 (赤色下線まで)、次にフランス語訳 (赤色下線まで)、続いてドイツ語訳 (赤色下線まで)、最後にスペイン語訳の順です。各グループの内部では、刊行年の逆順に並んでいます (つまり、最新の刊行書を先頭に、刊行年に逆進して排列)。全訳と部分訳も識別できます。これをみると、英訳は全訳が 2 種、部分訳が 1 種、フランス語訳は、全訳が 1 種、ドイツ語訳は、全訳が 1 種、部分訳が 4 種、スペイン語訳は、全訳が 2 種 (うち 1 種はフランス語訳からの重訳) あることがわかります。

資料 C における用例 2 のすべての訳例をリストアップすると、資料 E が得られます。

A Harris, 57-59: “[Since they were in the same house] the woman

(4)

saw him often, but for his part the young man acted as if she were invisible.”

B McCullough, 83: “[Presently, however, the affair came to an end. Since the two served in the same household, they were always meeting,] but though the woman saw the man plainly enough, he behaved as if she were not present.”

C Vos, 1:183: “[As they were working in the same place,] (the man) was (constantly) seen by the girl, whereas he ignored her.”

D Renondeau, 43: “[Comme il avait son emploi dans les mêmes lieux,] la fille l’apercevait souvent, mais lui, faisait comme s’il ne la connaissait pas.”

— [Revon, oo]

E Schaarschmidt, 25: “[Da sie nun am selben Ort ihren Pflichten nachkamen,] sah zwar die Dame ihn an, der Kavalier hingegeben tat, als gäbe sie nicht.”

— [Naumann & Naumann, oo]

— [Benl, oo]

F Pfizmaier, 24: “[Es war derselbe Ort, und] weil sie von einem Weibe mit den Augen gesehen wurde, dachte der Mann nicht, dass es irgend Jemand gewesen.”

G Cabezas García, 55-57: “[Los dos por fuerza se cruzaban en Palacio frecuentemente,] pero él solía pasar de largo como si ella fuese invisible. “

H Renondeau/Solomonoff, 50: “[Como él tenía su empleo en los mismos lugares,] la muchacha lo divisaba a menudo. El hacía como si no la conociera.”

(この資料は『文語ハンドブック』には掲載されていません。理由の一つ

は、掲載すると、書物の分量が2倍に膨れ上がるため、一つは、数十を超える書物の著作権者から再録許可を得ることが必要になるためです)。いずれにせよ、資料Eの細部に立ち入ることは避けたいと思いますが、注意したいのは、A-Cが英訳、Dがフランス語訳、EとFがドイツ語訳、GとHがスペイン語訳であるという点です。私にとって、この書誌情報は三つの点で興味深いものです。第一は、学生たちに欧米語で読める学術資料の多くを知らしめるのに役立つこと、第二は、翻訳の相互比較に潜在的に役立つこと、第三は、日本古典文学に対する学術研究の資料が日本語文献、英語文献に限られないことを浮き彫りにしていること、この三つの理由からです。

私が日本の古典を教えていたときは、『文語ハンドブック』の資料とあわせて、『方丈記』、『徒然草』、『枕草子』などの抜粋を読みました。

『文語ハンドブック』刊行の目的は、つぎのようなものでした。文語の学習者に、古典語が引き起こす文法問題の、中心となる一群をマスターさせること、読者に実際の用語例の十分なサンプルを、議論すべき文法問題の説明を附して提供すること、前後の文脈に即して重要な、しかし扱いやすい分量の語彙を提示すること、読者に偉大な古典テキストの中の作品群を紹介すること、(そしてかれらが原典または翻訳により、さらに多くの作品を読むように誘うこと)、前近代の日本語、日本文学のための参考文献として役立つこと、などです。かくして、この『文語ハンドブック』は、古典日本語のための序説、入門用教科書、常用ガイド(他の文法書、読本、抜粋原典などと併用できる)、復習用の教本、或いは参考書として役立ち得るものと思います。また、中国研究者によっても、訓読の方式で解析された資料の解説を支援する書物として使われることを希望しています。

次に出版計画の第1項、森鷗外の翻訳文学についてですが、みなさまは、多分、鷗外の文学作品の3分の1、若しくは2分の1は、翻訳が占めていることをご存知と思います。鷗外は、Goethe ゲーテ、Byron バイロン、Heine ハイネ、Ibsen イブセン及び Kleist クライストを日本に紹介し、それによっ

(6)

て近代日本の小説、戯曲、詩の発展に巨大な影響を及ぼしました。彼の翻訳の90%以上は、ドイツ語の原文からの翻訳、或いはドイツ語訳から重訳であり、残りは、文言中国語からの翻訳です。

翻訳は、彼の他の文学的関心に関連して、鷗外自身にとって大いに役に立ちました。翻訳は、一人前になるための訓練、本業に替わる副業、あるいは補助的な活動として彼を助け、時には彼にとってより好ましい表現方法ですらありました。鷗外の翻訳活動は、この作家に対して、広範囲に及ぶ最良の指標を提供しています。鷗外の翻訳文学は、彼の純文学的作品と互いに導き合う関係にあり、それに対して靈感を付与し、一対となり、代理を務め、さらにそれ以上に重要な位置を占めています。

今年の3月、シカゴで開かれるアジア研究学会の年次例会において、私は、森鷗外の二つの翻訳作品、『即興詩人』と『ファウスト』を比較する報告をおこなう予定です。同時にこの作品が、双方とも、いかに彼の漢文の素養と漢詩の表現の影響を受けているか、についても論ずるつもりです。Hans Christian Andersen ハンス・クリスチャン・アンデルセンの『即興詩人』という作品の基礎は、童話物語 (メルヘン *Märchen*)、教養小説 (ビルドゥングスロマン *Bildungsroman*)、悪漢小説 (ピカレスク・ノベル *picaresque novel*)、及び紀行文 (*travelogue*) などであり、それらすべてが一体化しているものです。その舞台はイタリアで、ストーリーは、アントニオという少年の視点から語られます。彼はいろいろなタイプの女性と出会い、成年となり、愛と人生において成功を勝ち得ます。われわれは、Roma ローマ、Campagna カンパーニャ平原、Napoli ナポリ、Vesuvio ヴェスヴィオ火山、Sicilia シシリア島などイタリアのあちこちを見て回ることになります。率直に言えば、鷗外は、人を喜ばせる、楽しく、読みやすい書物を取り上げ、それを無比の魅力に富んだ素晴らしいスタイルで書かれた傑作に転化したのです。

『即興詩人』のすぐにも見てとれる隔世遺伝的な諸特徴、つまり、文語構文の集中的使用、凝った用語選択、そして雅文の恩恵を受けたある種の古風

な調子などつり合いをとっているのは、一見したところ目に入ってこないものの実は見かけ以上のものである現代的な要素です。それはすなわち教養小説の主題（愛を通しての自己発展のごとき）、欧米語に影響された言葉遣い、現実を豊かに超越したエギゾチックな新世界の語彙（外来語〔多くはイタリー語もどき〕の読みを伴った様々な形態の漢字複合語）などです。別の見方をしますと、『即興詩人』において、鷗外は新しい「ことば」を創造し、新しい世界（虚構的なイタリー）を創造し、浪漫的感受性（romantic sensibility）の形成を助けながら、文学のスタイルを変形しました。（この作品のスタイルは島崎藤村、与謝野晶子、石川啄木などの詩文学、及び泉鏡花、田山花袋、永井荷風などの散文文学に影響を及ぼしました。）『即興詩人』は、翻訳ではありますが（或いはより正しく言えば、翻案ではありますが）、私は、森鷗外の最も創造性に富んだ作品であると思っております。

これとは対照的に、『ファウスト』の翻訳において鷗外は、高度に古典的な作品は、真に口語的な日本語で提供されるべきだということを示したかのように思われます。問題の焦点は、『即興詩人』において出会う技巧的表現の多用よりは、むしろ知的な流れの中に時折はめ込まれた「名言」の使用にあります。『ファウスト』は、より平明な、飾りのない、時に高度に口語的でありながら、しかし優雅で技巧に富んだ日本語に置き換えられました。

さらにより重要なことは、鷗外が日本人の意識に「ゲーテ」を創造したということです。ゲーテが日本においてある種の達成した文化的権威を持っていることは、鷗外の文化人としての名声、および『ファウスト』を世に送りだした彼の熟練の翻訳に負うものです。権威に対する裏書、権威承認のスタンプ、ゲーテと文化を等値のものとしたことなどは、鷗外の功績です。ゲーテは、一度も人気作家になったことのない英語圏でよりも、近代日本文学において、より大きな影響力を発揮した、といえるかもしれません。星野慎一は、ゲーテが高山樗牛、尾崎紅葉、夏目漱石、島崎藤村、芥川龍之介、谷崎潤一郎などに対して、重要な影響関係にあったと論じています。ゲーテと鷗外に関するかれの著書では、上記の人々のそれぞれについて、1章を割いて



(8)

詳論しています。1979年から1992年の間に現れた日本語訳ゲーテ全集16巻は、日本で七つ目のゲーテ全集です。『ファウスト』の英訳は、たくさん出ていますが、英訳の『ゲーテ全集』は、ただ1種だけです。1998年から2000年まで、ゲーテ生誕250年を記念して、日本語訳『ファウスト』の新しい完訳が3種出ましたが、私の知る限り、この機会にも英語訳は1種も出版されませんでした。

確かに欧米語の表現様式が、鵬外によって為されたような翻訳を通して、近代日本の言語形式や文学、及び心理的地平を変形させたと言っても過言ではないでしょう。

追求すべき他の道筋の中では、この刊行計画における「翻訳理論」の観点から、鵬外の『即興詩人』や『ファウスト』などの翻訳が、伝統的な翻訳の両極、つまり逐語的な訳か自由訳か、忠実な訳か創造的な訳か、誤訳か正確な訳か、異国語調の訳か自国語調の訳か、などのどこに位置するものが問われることでしょう。そしてまた、ポストモダンの概念、例えば、transgression 逸脱、transparency 透明性、contestation 異議申し立て、appropriation 盗用、そして hegemonic center vs. subaltern periphery 支配的中心対副次的縁辺などの概念が鵬外の翻訳作品に、どの程度関連するのかも問われることでしょう。明らかに多くの仕事がまだ残されています。

刊行計画の第2項、つまり森鵬外の漢詩については、私は彼の231首の作品全体の翻訳と注釈に着手しています。この計画にとってかけがえのないものは、鵬外の漢詩全首の注釈付き現代日本語訳です。それは2種類あって、一つは、古田島洋介の著、一つは陳生保 Chén Shēngbǎo (Chin Seiho) の著です。また助けになるものとして、《北遊日乗》所収の鵬外詩に関する安川里香子の近著、及び比較的早い時期のものですが、小島憲之と藤川正数による、単行書に匹敵する長さの鵬外に関する論文があります。

資料Fには、私が詩をどのように紹介しようとしているのか、そのサンプルを示しました。1916年、鵬外は、1892年に刊行された著作集『美奈和集』

(水沫集)の再版に際して、二首の漢詩を作りました。その一首は以下のようなものです。(『水沫集』は著者の有名な創作作品、つまりドイツを舞台にした3つの短編—「舞姫」、「うたかたの記」、「文づかい」を含むだけでなく、Alphonse Daudet アルフォンス・ドーデ、Heinrich von Kleist ハインリッヒ・フォン・クライスト、Gotthold Ephraim Lessing ゴットホルト・エフライム・レッシングの散文の翻訳と、鷗外自身が画期的と見なしていた実験的な翻訳詩集「於母影」をも含んでいることを銘記しなければなりません。)

鷗外の原詩は、二種類の日本語訳を附して、資料Fに示します。

丙辰夏日校水沫集感觸有作 (1916, No. 1 of 2 [#199, entire poem])

*Hinoetatsu kajitsu, 'Minawashū' o kōsu, kanshoku shite saku ari*

Bǐngchén xià rì, jiào 'Shuīmò jí,' gǎnchù yǒu zuò

"Hinoetatsu Year[1916], Spring Day: Editing *Minawashū*, I Feel Moved and Write"

空拳尚擬拓新阡 *Kūken nao shinsen o hirakan to gisuru mo*

Kōngquán shàng nǐ tuò xīnqiān

2 意氣當年却可憐 *Iki tōnen kaette awaremu beshi*

Yìqì dāngnián què kělián

將此天潢霑涸沫 *Kono tenkō o motte komatsu o uruosan to shi*

Jiāng cǐ tiānhuáng zhān hé mò

4 無端灑向不毛田 *Hashi naku mo fumō no den ni mukatte sosogu*

Wúduān sǎ xiàng bù máo tián

古田島洋介訳:

誰の助けも借りず、独りで新しい境地を開拓しようとしたが

2 当時の気負いぶりは(今からみれば、無謀とはいえ)かえってほほえましい気がする。

この「水沫集」に収めたさまざまな作品によって、文学者としての生命をつなぐことさえできればと願っていたところ

(10)

4 想いがけなく、沈滞していた文壇に活を入れる結果になったの  
だった。

陳生保訳：

若いころの私は素手でありながら、文壇に新しい道を切り開こう  
とした。

2 当時の軒昂たる意気はいまからふりかえってみると、たいへん愛  
らしかったといえよう。

あたかも天の池から一滴の水を汲んで来て、

4 このはてしなく広がる不毛の土地にそそぐようであった。

私は、最初の翻訳で、最初の2句を次のように訳しました。

空拳尚擬拓新阡 / 意氣當年却可憐

With but bare fists, intent on opening new fields —

2 My determination then, only brings a smile now.

ただむき出しの拳のみによって、新しい土地を拓こうとしたが、  
そのときの私の決意は、今思うと失笑を誘うだけだ。

しかし、私は、次の2句を2度、訳しました。最初の翻訳Aは、極端な  
逐語訳で、次の通りです。

將此天潢霑涸沫 / 無端灑向不毛田

With this Heavenly Pond, moistening dessicated foam;

4 Useless, to sprinkle water on non-arable fields.

この天の池によって、乾ききった泡を濡らそうとしたが、  
無益にも、水を不毛の地に散布しただけだった。

そこで、私は、2度目の翻訳Bでは、「解釈 paraphrase」の条でつぎのよ

うに翻訳しました。

With freshets of water as from the Milky Way's stream (namely, with my new and experimental writings of twenty-five years ago that are being reprinted here—both original works and translations), I wanted to resuscitate a literature that, like the fish in *zhuāngzǐ* 莊子, was stranded and dry to the gills;

- 4 But it is pointless to try to water totally barren land (a public and a literary world [*bundan* 文壇] both unreceptive).

銀河の流れからのような、水の奔流により（つまり、ここに再版されることになった25年前の私の新しい実験的な作品—創作と翻訳の双方—によって、『莊子 *Zhuāngzǐ*』における魚のように、立ち往生して、完全に干上がってしまっているような「文学」を蘇えらせたいと願ったのだ。

しかし、全くの不毛の土地を灌漑することは無意味なことだった。—(民衆も文壇もともに私の作品を受け入れなかった)。

この解釈は、第3行の優雅な変形（天河の代わりに天潢を使う）と、同じ行における莊子への暗喩（涸沫<sup>こまつ</sup>を霑<sup>ぬら</sup>す）、及びこの二句の「感情」を浮き彫りにします。（せいぜい苦笑に止まればよいとの期待しかなかったものの、実は絶望的に落ち込ませられた、若いころの評価されなかった努力の思い出ということ。）

このサンプルは、翻訳における二つの永遠の問題を処理する一つの方法を示すものです。第1は、暗喩をどのように扱うか、ということ、第2は、詩句が提供する文字通りの具体的な意味と潜在している暗示的な意味との間のしばしば解決しがたい緊張をどのように処理するかという問題であります。ある場合、解決は、二つの翻訳を提示することです。ここでは、具体的イメージは、翻訳Aにおいて維持されています：空拳 *kūken* (*kōngquán*), 'bare fists'; 霑 *nurasu* (*zhān*), 'to moisten'; 涸沫 *komatsu* (*hémò*), 'dessicated

(12)

foam’; 灑 *sanpu suru (sǎ)*, ‘to sprinkle’; 不毛田 *fumō no tsuchi (bùmáo tián)*, ‘non-arable land’ など。そしてこれらの語から間接的に表された意味は、翻訳 B で充足されています。

それぞれの詩句のために用意した体系的な手段に注意してください。

(A) 漢字の原文

(B) ローマ字で表記した訓読文 (*Kūken nao shinsen o hirakan to gisuru mo*)

(C) 現代中国語の読み (声調つき) (*Kōngquán shàng nǐ tuò xīnqiān*)

(D) 英語訳 (*With but bare fists, intent on opening new fields—, etc.*)

私は、實際上、この本が、日本文学専攻、及び中国文学専攻の欧米人学生によって用いられることを望んでいます。訓読文は、日本語を知っているか、或いは勉強している人にとって、漢文の構造を明確にするのに役立つでしょう。現代中国の発音表記は、現代中国語を学んだものの、知識の足りない人に役立つでしょう。その上、中国語のローマ字表記は、1) 鵑外の漢詩の殆どすべてに維持されている脚韻を浮き上がらせるのに役立つともに (ここで韻字は下線付きのローマ字で示されている *qiān, lián, tián* です)、2) 詩の行のもつもう一つのリズム感を人々に教えるのにも役立ちます。つまり視覚的、聴覚的に漢字の音読みに近づくという意味や、詩の休止位置をよりよく知らせるという意味を持っています (というのは、七字句の主要な休止位置は、第4音節のあとに、そして第2の休止は、しばしば第2音節のあとに来るからです —ここでは、ローマ字表記に余白を置いて休止を示しています)。

将来、完成を期す書物では、一系列の詩や個別の詩のいくつかについて紹介する文章を附すとともに、彼以前の作者たちの作品を鵑外が典故とする箇所を明らかにし、語の先行使用例の選りすぐりのリストなども載せる予定です。

そこに内在する関心とは別に、鵑外の漢詩は、明治漢文作品の歴史において、重要な一章を形成するものです。その上、それらの詩は、鵑外に関するさまざまな話題 (従来、これらの話題において漢詩が引用されることは割合

少なかったにもかかわらず)にも、光を投げかけてくれます。彼の女性に対する態度、医者・軍人としての役割、翻訳活動、ドイツ滞在、山縣有朋との交流、友人(特に彼が一連の詩を捧げた人物、尾崎行雄、石黒忠憲、及び荒木寅三郎)に対する相談役としてのスタンス、時事問題、例えば、スエズ運河開通、台湾占領、日清戦争などに対する態度、及びさまざまな画家と絵画に対する批評などです。

漢詩は、鷗外の作品に対して、『即興詩人』の次の一節から説明されるような、また違った形の影響を及ぼしました。資料Gをご覧ください。ここでは初めに、デンマーク語からの3種の直訳を示しています。1845年のMary Howittによる英訳(G1)、1876年のDenhardtによるドイツ語訳(鷗外訳の底本)(G2)、そして1987年の鈴木徹郎による日本語訳(G3)です。これらにより、アンデルセンが元来何を語っていたのかがわかります。

1. Mary Howitt (1845):

Floating in the ascending beams of the sun, not far from Capri, lay a new, wondrously beautiful island formed of rainbow colors, with glittering towers, stars, and clear, purple-tinted clouds. "Fata Morgana!" exclaimed they all;...

2. H. Denhardt (1876):

In den Strahlen der aufgehenden Sonne schwamm unweit Capri eine neue, schöne, von den Farben des Regenbogens erbaute Insel, mit glänzenden Thürmen, Sternen und klaren, purpurgefärbten Wolken. "Fata Morgana!" riefen sie Alle...

3. 鈴木徹郎 (1987):

ある朝、漁師たちは浜の波打ち際に群がっていた。さし昇る朝日の光を浴びて、虹色に染まった見慣れぬ不思議な島がカプリ島のわきに浮かんでいた。日に照り輝く塔が立ち並び、星がきらめき、深紅の雲がたなびいている。「ファータ・モルガーナだ!」

むき出しの原文を、鷗外の狂詩曲風のバージョンと比べてみてください  
(G4)。

4. 森鷗外による「翻案 (adaptation)」:

一箇の奇しく珍らしき島國のカプリに近き處に湧き出でたればなり。  
飛簷傑閣隙間なく立ち並びて、  
その翳なきこと珠玉の如く、  
その光あること金銀の如く、  
紫雲棚引き星月麗れり。  
現にこの一幅の畫圖の美しさは、  
譬へば長虹を截ちてこれを彩りたる如し。  
蜃氣樓よと漁父等は叫びて、…

(『即興詩人』は散文ですから、勿論普通は、一行で印刷されていますが、ここでは故意に数行で表示しております。) 最小の編集加工によって、容易に上記の鷗外の一節を標準的な五言詩、七言詩の詩形に書き直すことができることに注意してください。『即興詩人』においては、同様の操作で散文の一部を詩句に変化できる場合が数多く存在します。これは、鷗外の漢詩と彼の他の作品との間の決して偶然ではない関係を反映しているものです。このような箇所は、なぜ島田謹二氏が『即興詩人』を指して、「アンデルセン原作、鷗外改作」と称したかを説明しています。

鷗外の『ファウスト』について、大急ぎでコメントを加えさせてください。一つの作品に対して早い時期になされた良質の翻訳、特に有名人による翻訳は、しばしば、後継翻訳者たちに一種の圧政を行使することができるものです。以下は、その一つの例といえるかもしれません。資料Hをご覧ください。原文は、H 1 に載せておきました。: Christ ist erstanden, / Aus der Verwesung Schoß。鷗外の訳は、H 2 です。問題は、ドイツ語の「母胎」を意味する Schoß (その延伸義は、胸、膝、さらには内臓にまで及ぶ) をめ

ぐっておきています。もしも大半の翻訳者が今行っているように、一つの文学的テキストを扱うに当たって、原典の言語的核心にできるかぎり固執すべきだと信ずるのであれば、もっと具体的な訳語がここで選択されていてもよかったかもしれません。しかし、鷗外の後継者たち (H3-H6) は、おそらく無意識のうちに鷗外の訳例に影響されて、大部分が Aus der Verwesung Schoß に対する抽象的な扱いに汲々としているように思われます (下線または太字で強調してあるように)。

- 1 Johann Wolfgang von Goethe, *Faust* (lines #00797-00798):

Christ ist erstanden,  
Aus der Verwesung **Schoß**.

- 2 Mori Ōgai 森鷗外 (1913):

物を朽ち<sup>くず</sup>壊れしむる土<sup>つち</sup>の膝を  
立ち離れつゝ、主<sup>しゅ</sup>はよみがへりましぬ。

- 3 Sagara Morio 相良守峯 (1958):

キリストはよみがえりましぬ、  
朽ち果てぬべき大地の胸より。

- 4 Tezuka Tomio 手塚富雄 (1964 [1974]):

キリストはよみがえりたまいぬ。  
滅びの土を離れたまいぬ。

- 5 Shimada Shō 柴田翔 (1999):

キリストは甦りぬ  
滅びの淵を離れ。



(16)

6 Ikeuchi Osamu 池内紀 (1999):

ただれた膝元より  
キリストは甦った

7 Konishi Satoru 小西悟 (1998):

キリストはよみがえられた、  
腐った人の世の胎内から。

開拓者としての翻訳者は、しばしばこのような引力を及ぼすものです。小西悟氏 (H7) だけがこの呪文を破壊し、直接に「胎内」の訳語を使いました。このことは、他の翻訳者がすべて間違っているというわけではありません。それぞれが皆、それぞれの方法において、良好で有用な訳文を提供しているといえます。たいへん面白い例であると思います。

次に資料 I に移ります。刊行計画の第 3 項、鍾嶸 Zhōng Róng の『詩品』について単行書を完成させたいと願っています。オックスフォード大学に提出した元好問 Yuán Hàowèn の文学批評に関する学位論文の一部として、鍾嶸の『詩品』の 80% を訳出しました。鍾嶸の作品は、元好問に巨大な影響を与えたからです。それ以来、元好問の文学批評に関する私の著作は刊行され、『詩品』に関する論文 2 篇も公表されました。一つは、この作品における評価の性格についてのもの、一つは、「古今集序」に対する詩品の影響についてのものです。しかし、『詩品』の三つの序文と、「上品 *shàngpǐn*」及び「中品 *zhōngpǐn*」に分類された詩人に対する批評の翻訳は、大部分まだ印刷されていません。英語翻訳を 80% 完成したときには、資料 I の第 2 ページに挙げた日本語の学術研究を利用することができました (資料 I, Section #2)。例えば、高松亨明の開拓者的業績、京都の有名な詩品研究班から発行された学術研究などです。

高松亨明 (1959) / 興膳宏 (1972) / 高木正一 (1978) / 岡村繁 (1984, three

prefaces only)

私は、1983年に『詩品』の研究を停止しました。それまで、この作品の現代中国語訳は、短い断片的なものがあるのみで、テキスト全体の完訳はありませんでした。しかし、それ以来、四半世紀を経て、少なくとも7種の現代中国語訳が現れています (Section #3)。

Zhōu Wěimín 周伟民 and Xiāo Huáróng 萧华荣 (1985)

Zhào Zhòngyì 赵仲邑 (1987)

Zhōu Zhènfǔ 周振甫 (1998 [2006])

Xú Dá 徐达 (1990)

Yáng Míng 杨明 (1999)

Chén Yuánshèng 陈元胜 (1994)

Chéng Zhāngcàn 程章燦 (2003)

そして、『詩品』に関する中国語論文は、驚くほど分量を増しています (Section #4)。

Gǔ Zhí 古直 (1926)

Méi Yùnshēng 梅运生 (1982)

Chén Yǎn 陳衍 (1926)

Yì Hwì-gyo 李徽教 (1983)

Zhāng Chénqīng 張陳卿 (1926)

Liào Dòngliáng 廖棟樑 (1986)

Chén Yánjié 陳延傑 (1929)

Xiàng Chángqīng 向长清 (1986)

Yè Chángqīng 葉長青 (1933)

Lǚ Déshēn 吕德申 (1986 [2000])

Dù Tiānmí 杜天縻 (1935)

Yǔ Kèkūn 禹克坤 (1989)

Chē Zhuhuan (Ch'a Chu-hwan)

Luó Lìqiān 羅立乾 (1990)

車柱環 (1960)

Cáo Xù 曹旭 (1994, 1998, 2003: 3 volumes)

Liú Chūnhuá 劉春華 (1963)

Wáng Shúmín 王叔岷 (1992)

Xǔ Wényǔ 許文雨 (1967)

Wáng Fāguó 王發國 (1993)

Lǐ Dàoxiǎn 李道顯 (1968)

Xiāo Shuǐshùn 蕭水順

Hé Shìzé 何士澤 (1969)

(Xiāo Xiāo 蕭蕭) (1993)

Wāng Zhōng 汪中 (1969)

Jiǎng Zǔyí 蒋祖怡 (1995)

Chén Duānduān 陳端端 (1972)

Shimizu Yoshio 清水凱夫 (1995)

Chén Qìnghào [Chan Hing-ho]

Zhāng Huáijīn 張懷瑾 (1997)

陳慶浩 (1978)

Yáng Zǔyù 楊祖聿 (1981)

Zhāng Bówěi 張伯偉 (1999)

Féng Jíquán 馮吉權 (1981)

Zhāng Liándì 張連第 (2000)

Liú Diànjué (D.C.Lau) 劉殿爵, Chén Fāngzhèng

陳方正, and Hé Zhìhuá 何志華 (2007)

この25年間に出た中国語の研究論文の量 (Section #4 の右側コラム) は、これに先立つ55年間に出た論文に (Section #4 の左側コラム) 匹敵する分量になっています。

昨年、私は六朝資料のハンドブックに『詩品』という論文を入れる準備をするように要請され、入手し得る限りの研究論文を概観しなければならなくなりました。これらの新しい研究については、つい最近ようやく知ったばかりです。しかし、私の翻訳を更新し、研究を正しく完成させるために、『詩品』の研究に追いつこうとすれば、読まなければならない本があまりにも多くあることを知り、私がショックを受けたことは、言うまでもありません。

私の研究の癖は、おそらく特異体質とでもいうべきものです。ひとつの分野を2,3年或いは4年かけて、集中的に研究します。その後は、数年間放置して“休眠状態”にし、他の分野を研究します。そうすると、数年のちには、さらに視点は拡張し、新鮮な気分で元のテーマに戻ることができるのです。私は、自分の過去の著作について、これまで語ったことはありません。しかし、資料Jをご覧ください。

#### Maturation Process 発酵の過程 : Lapsed Time on Book-Projects

Book-Project	60%-80% Completed By	<b>Years Then Lapsed</b> 数年間休眠状態	Final Revisions	Date Published
韋莊 : 詞	1966	<b>12-13</b>	1978-79	1979
元好問 : 文学批評	1976	<b>5-6</b>	1981-82	1982

吉川幸次郎：元明詩概説	1972	<b>15-16</b>	1987-88	1989
Japanese Scholars of China				
日本の中国学専門家	1983	<b>9</b>	1992	1992
文語ハンドブック	2003	<b>2</b>	2005	2006
鍾嶸：詩品	1976	<b>33+</b>	?	
元好問：総合的書物	1977 (2001 rev.)	<b>24+8+</b>	?	
森鷗外：翻訳文学	Ongoing since 1999		?	
森鷗外：漢詩	Ongoing since 1999		?	

将来一冊の本となる原稿の、大半が完成された初稿の段階から、出版のための最終稿が完成するまでの間に要した年月に注意してみてください。韋荘についての本に12年、元好問の本に5-6年、そして吉川の翻訳には15-16年もかかっています。これが、発酵の過程における重要な部分であると思っております。この種の研究は、非常に難しいので、それを完成させるためには、「息継ぎ」とも言うべきものが必要なのでしょうか。十分な長さの休止をとった後こそ、より良い改訂、書きなおしが出来るのです。

唯一の問題は、『詩品』の草稿の場合のように、休眠期間にあまりにも多くの研究が出現し、追いつくことが困難になるという事態がありうることです。

この四つの刊行計画の完成は、二つの大きな問題、つまり十分な時間と良好な健康を得られるか否かにかかっていることを、私は承知しています。Seneca セネカがラテン語で言っているように、まことに「Vita brevis est, ars longa 人生は短く、芸術は長し」なのです。誰も未来のことは予測できません。すべての計画は、予期した期間の少なくとも2倍はかかるように思われます。そして、断言しますが、われわれは、われわれの前に置かれている膨大な資料と比較して、われわれの知ることのできるものが、また知っていることが、いかに少ないかを、悲痛な思いで意識するものであります。

四つの刊行計画のうち、特に元好問についての総合的書物は、完成までに

はまだ時間がかかりますが、いつか完成すると思います。ちょっとかかりすぎではありますが。元好問の文学評論に関する博士論文を完成したのち、博士論文に入れていなかった詩 200 首以上の翻訳の原稿を書くという形で、この作家についての研究を続けました。24 年後の 2001 年に、翻訳の改訂に着手し、補足の詩の翻訳原稿を書き、一連の詩の序説を書き、さらに節および章に対する序説を書きました。例えば、書物の原稿の第 2 章は、暫定的に「暗闇迫る世界」と名づけられていますが（というのは蒙古人がやがて北方中国を支配することになるからです）、次の 6 節から成り、それぞれにその内容を説明する詩を伴っています。A) 概観、B) 長引く影、C) 皇帝の逃亡、D) 降伏のあと一宮廷と詩人、E) 宮女と詩人の移送、F) 放逐と傷ましき最期。

ここで元好問の詩の翻訳の現状を、ご紹介したいと思います。資料 K をご覧ください。

## 石嶺關所見

### As Witnessed at Stone-Ridge Pass

“Stone-Ridge Pass” (Shí língguān): a pass south of YHW’s native Xīnzhōu 忻州, in Xiùróng Prefecture 秀容縣, on the road to Yángqū 陽曲 (modern Tàiyuán 太原).

CIRCUMSTANCES: The poem describes the panic of people fleeing when the Mongols attacked Xīnzhōu in the third month of 1214. YHW’s brother died in the disturbances, and perhaps is being referred to in Line Five.

軋軋旃車轉石槽

2 故關猶復戍弓刀

Screech, screech—felt-covered carts wind through rocky troughs,

LINE PARAPHRASE: The screeching wheels of transport wagons in flight from the Mongols can be heard as they try to negotiate the twists and turns in the rutted out stone of the pass road.

“Rocky troughs”: i.e., “stone horse-troughs” formed by the elements—the working of rain, snow, and ice—and the recurrent passage of vehicles. (The term is also used to describe the “bladder” of a lute, and has been taken to refer to such a shape here.) “Felt-covered carts”: carts covered in felt to protect their contents from the weather and depredation; here, they could be the wagons of refugees or of military transports; see Favored Expressions (*zhānchē*).

The ancient pass is still guarded by bow and blade.

LINE PARAPHRASE: At the time-honored pass, our troops still hold on.

連營突騎紅塵暗

4 微服行人細路高

A string of camps, lightening cavalry—red dust darkens;

LINE: Describes the continuous incursions of fast-moving Mongol cavalry. (Cf. Poem #xxx, for more description of Mongol mounted units.)

“Red dust darkens” : the dust kicked up by the Mongol cavalry, “red” here having undesirable connotations of heat and danger.

People in disguise, on the run—narrow paths steep.

LINE: People on the run (i.e., refugees) take narrow paths higher up

than the routes used by transport wagons; they are disguised as being sick, aged, or crippled, probably to avoid being pressed into service by roving Mongol bands. The poet could be referring to himself and/or others.

已化蟲沙休自歎

6 厭逢豺虎欲安逃

That some have become insects or grains of sand, do not lament;

“Insects or grains of sand”: *Tàipíng yùlǎn* (zh. 47) and *Yìwén lèijù* (zh. 90) versions of the *Bàopǔzi* 抱朴子: “Whereas ‘gentlemen’ become gibbons or cranes, ‘nobodies’ become insects or sand”; YHW’s brother, who died in the disturbances at about this time, may be referred to here, in bitter terms. “Do not lament,” because it is useless to lament.

Tired of running into jackals and tigers, where can one flee?

“Jackals and tigers”: the Mongols.

青雲立玉三千丈

8 元只東山意氣豪

In clouds of blue, upright as jade, three thousand lengths high—

“Lengths”: about ten feet each. “Upright as jade”: see *Favored Expressions* (*lìyù*).

All that is left is East Mountain, its élan heroic.

LINE PARAPHRASE: Only East Mountain remains basically proud. It does so

because the name (that of a mountain in Zhèjiāng) is associated with the hermit, Xiè Ān 謝安 (320-385), who stayed there in retirement; when he did emerge, however, his family defeated Fú Jiān 符堅 and saved the (Jìn 晉) dynasty. By the same token, might our East Mountain nurture such heroic deeds?

“East Mountain” : nearby “Boat-Mooring Mountain” (Xì zhōushān 繫舟山), according to Hao Shuhou. [Look up *Dōngshān bù chū* 東山不出 as allusion of hermit's hiding away.]

1214年の詩で、金王朝滅亡の20年前の作、上記の「B) 長引く影」から取りました。本日、皆様に事態がどのようなものであるかについてよく知っていただくために、日本語に訳された詩を意識的に取り上げました。ただ、この書に収めた詩の多くは、外国語に訳されたことのないものです。ついでにちょっと触れておきたいのですが、私が最初に通読した日本語の書物は、1969年に読んだ、鈴木修次の『元好問』です。その数年後、1973年の新年に幸運にも鈴木先生を訪問することができました。私は今でも、先生のこの本に非常に敬服しております。私はまた、元好問の詩に関する小栗英一氏の本を読み、裨益を受けました。本日選んだ詩は、小栗先生によって日本語に訳されています。そこで、まず小栗訳を読んでみます。(資料Kの2頁を見てください)。

小栗英一訳：

ぎしぎしと音をたてて物資を満載した車が、石の桶おけのような地形を歩いていく、昔の関所のあとに今もなお弓や刀をもって我が軍がまもっている。

かなたの敵の布陣は、とび出す騎兵で砂ぼこりはくろく、身をやつしていく難民たちの行く手はきわめてけわしい。

戦死して虫や砂と化してしまった兵士たちは歎いてもむだだろうが、わたしは恐ろしい猛獣のような奴らにはいやというほどあった、これからどこへ



(24)

逃げたらいいか。

この戦乱のさなかにも大空の青雲に犯しがたくそびえる三千丈の山、ああ、この東山だけがむかしどおり不安をはねのけるように意気盛んに見える。

ここで中国語のテキストを朗読していただきます。

石嶺關所見

軋軋旃車轉石槽

2 故關猶復戍弓刀

連營突騎紅塵暗

4 微服行人細路高

已化蟲沙休自歎

6 厭逢豺虎欲安逃

青雲立玉三千丈

8 元只東山意氣豪

次に、自分の英訳を読み上げてみます。

“As Witnessed at Stone-Ridge Pass”

Screech, screech—felt-covered carts wind through rocky troughs,

2 The ancient pass is still guarded by bow and blade.

A string of camps, lightening cavalry—red dust darkens;

4 People in disguise, on the run—narrow paths steep.

That some have become insects or grains of sand, do not lament;

6 But, tired of running into jackals and tigers, where can one flee?

In clouds of blue, upright as jade, three thousand lengths high—

8 All that is left is East Mountain, its élan heroic.

しかし、強調しておきたいのは、本日の講演にとって、私の翻訳そのものの出来栄は、副次的であるということです。申し上げたいのは、鵬外の漢詩の翻訳で例を示した問題、つまりいかにして詩の行の具体的な意味と暗示的な意味とを同時に扱うか、という問題に対し、異なる処理法を提示するということです。例えば、ここの第1行におけるように、原語により即した直訳だけでなく (Screech, screech—felt-covered carts wind through rocky troughs, ぎしぎしと、毛氈で覆われた車が、石だらけの播鉢谷を旋回して登ってゆく)、同時に「LINE PARAPHRASE (解釈)」において、より詳しい解説が示されています (The screeching wheels of transport wagons in flight from the Mongols can be heard as they try to negotiate the twists and turns in the rutted out stone of the pass road, モンゴルから逃げてきた輸送車の車輪のきしみが、曲がりくねった悪路を何とかのりきろうと、轍で削られた小道の石とこすれるたびに聞こえてくる)。その上、詩の理解に必要なか或いは有効な場合、(第3行及び第4行におけるような) 行の内容、(第6行の豹虎に対するような) 特殊な語句、或いは、(第5行の「抱朴子 Bào pǔ zǐ」のような) 典故などについての解説があります。ちなみに、第8行に対する説明は、従来の書物の触れていないものです。すべての「解釈」は、同じページに小さい字で表示してあります。それは、ずっと大きな文字で示されている原詩とその基礎的逐語的な訳から区別され、これらを理解するために役立つでしょう。

ここでの問題は、いかにして多くの情報を目にみえるように、しかし読者を混乱させないように伝えるか、ということ、つまり部分的には、提示の仕方の問題であります。例えば、合理的な処理方法を考えて採用したのですが、詩が作られた環境は、詩題の下に説明してあります。

コンピューターの出現については、神に感謝したい、と思います。現在、異なる文字 (漢字、仮名、ローマ字)、異なる印字スタイル (Garamond ガーランド体、明朝体、Times New Roman タイムズニューロマン体)、及び異なるフォント (10ポイント、13ポイント、16ポイント) を用いて、しかも

すべてを同じページに、時には同じ行に、表示することができます。すばらしいことです！ 1981年に元好問の文学評論に関する書物の最終準備に入っていたとき、漢字印刷の唯一の方法は、誰かに手書きで埋めてもらうために漢字の箇所を空けておくか、書物を東アジアでタイプセットしてもらうかでした。両方とも厄介で、時間がかかり、そして費用も高くついたのでした。

資料Kの詩に関して、改訂作業とは別に、最低限、中国語テキストのローマ字表記（声調つき）を示し、引用された典故に対応する中国語資料を掲載し、元好問の他の関連する詩との相互対照を補充する必要があります。

ここで、ちょっと、資料Aに戻ってください。ページの下の方に日本語で書かれた私の論文があがっています（「中国文学及び日本文学：一西洋人の研究方法について」『中国語中国文学研究室紀要』4、2001年4月，pp. 47-65.）。これは、2000年に私が東大で行った講演の原稿です。この論文は、この数年、私が翻訳に関して扱おうとしてきた問題のいくつかを論じたものです。つまり、吉川幸次郎の作品のスタイル、元好問の典故の用法、及び他の一般的翻訳問題などをどのように扱うべきかということです。個別の用語選択は確かに肝要ではありますが、別の言語に作品を再生させるときに（或いはそれを評価するとき）、最も重要なのは、その翻訳の調子、文体、リズムの総体であると思います。

この論文においては、元好問の文学批評についての、より豊富な議論とともに、彼の詩の資料検索目録に関する説明が附されています。また、詞 *cí* に関する資料、とくに韋莊 *Wéi Zhuāng* についての私の書物、及び李清照 *Lǐ Qīngzhào* とフェミニスト批評に関する私の論文などの資料が含まれています。さらに、『詩品』における評価について、及び『詩品』の「古今集序」への影響についての私の論文の内容が要約されています。

みなさんの中でも、大学院生や研究者の方々にとって興味があるかも知れないという理由から、本日ご紹介する書物の最後に、『日本の中国学専門家ハンドブック』 (*Japanese Scholars of China: A Bibliographical Handbook* :

Lewiston, N.Y.: The Edwin Mellen Press, 1992.) を取り上げることにします。最初に、この書物のいくつかの背景を申し上げておきます。1970年から1972年の2年間、京都で過ごしたために、アメリカに帰ってから、私は中国学専攻の大学院生に、日本語による研究を2、3時間で紹介するよう2度依頼されました。これがきっかけとなって、私は日本の学者による中国研究の資料をもっと整理発展させてみようと思いついたのです。

日本の中国学資料は、領域を特定せず、主な参考文献を挙げるだけでも膨大なものなので、私は3巻にまとめることを思いつきました。ひとつは学者別、もうひとつは学問分野別、つまり、中国史、中国文学、中国の法律など、そして、三つ目は王朝別の分類、すなわち時代による区分です。これは要するにひとつの大きなケーキを三通りに切るようなものです。その上、既存の参考文献の大多数は、いずれもこの学者別、分野別、時代別という三つの軸のどれかにあてはまるものであったからです。

私は、この仕事のために、一年間の助成金を得ることが出来ました。膨大な資料を集め、準備ノートや、インデックスカードを、3巻すべてにつけて作り、第1巻の『*Japanese Scholars of China: A Bibliographic Handbook* / 日本の中国学専門家ハンドブック』を完成しました。しかし、その後はその仕事を続ける資金に恵まれませんでしたし、今、25年もたってみると、もうそれを続ける気はありません。労多くして、益少なしという仕事だからです。(西洋では、文献目録といった業績は、低く見られる傾向があるのです。)

とはいえこの書について、ちょっと紹介させていただきたいと思います。この書は、20世紀の日本人中国学学者1500人以上の情報を網羅しています。45年前に出版された「日本における東洋学論文目録」の著者索引には10,000人近くの名前を載せていますから、採択基準を考える必要があることは明らかです。このハンドブックへの収録基準は、非常に実用的なものでした。というのもこの本は、日外アソシエーツ編集の『中国文学専門家辞典』と嚴紹盪 Yán Shàoàng の『日本の中国学家』*Rìběn de Zhōngguó*

*xuéjiā* に載っているすべて（さらに、鄧嗣禹 Dèng Sìyǔ (Teng Ssu-yü) の文献目録、『*Japanese Studies on Japan & the Far East: A Short Biographical and Bibliographical Introduction*』に掲載されている多くの人たち）の索引として使えます。（また、このハンドブックは、嚴紹盪の本の中に見える日本人学者の名前の読み間違いを訂正しています。）さらにこのハンドブックには、この三冊に載っている学者のほかに、次のような中国学専門家も含まれています。（A）日本の中国学者で、別に出版された目録にその論文のタイトルが載せられている人、（B）全集のある人、（C）献呈された記念論集のある人、（D）追悼文を贈られている人、（E）著書が英語、またはその他のヨーロッパ言語に少なくとも一冊全訳されたことがある人。ですからおわかりのように、今は故人となってしまった学者、あるいは少なくとも25年前に活躍していた学者が主たる範囲です。現在の東洋文庫或いは東大の中国学の先生方の多くは、その当時は若すぎて、収録されておられません。

ひとつの例として石田幹之助の項目を手短かに見てみましょう。石田幹之助の項の横に石田の専門分野の簡単な紹介があり、その下には Yen 394 とか Teng #142 とあります。これは、石田が嚴紹盪の本では394ページに、鄧嗣禹の目録では142番にでているということです。その下、「國學院雑誌」と「史叢〈日本大学〉」の前のプラス印（+）は、そこに石田の業績目録があることを示しています。「日本古書通信」の前の星印アスタリスク（\*）は、石田の業績の簡略目録を示しています。また、「古代文化」から始まるその他8つの項目についている黒点（・）は、石田の人物と学問についての資料、例えば、追悼文、弟子たちによる恩師の思い出、恩師の業績を語る座談記録などを示しています。ギリシャ文字φは、Festschrift、つまり二つの論集が石田に献呈されたということを示しています。どちらにも石田の著述目録があり、一冊目はあわせて28ページ、二冊目は3ページから9ページにわたって載っているという事を表しています。それぞれの記念論集の項の最後にある TRNS #014、TRNS #015 は『東洋学論集内容総覧』（1980年出版）の掲載番号を示しています。この『総覧』はありがたいことに、このよ

うな集団による業績についても、その内容をリストアップしているのです。もうひとつのシンボルマークは、ギリシャ文字の  $\varepsilon$  (epsilon) の反対の形ですが (3)、英語あるいは英語以外のヨーロッパ語での論文を示しています。ここには二つありますが、初めのものは、石田の著作目録、第二は、石田について書かれたものです。

おわかりのように、このハンドブックは、論文や論文目録そのものを掲載しているわけではありません。それはむしろ、日本の中国学専門家に関する文献目録やその他の資料を知るための手がかりを示しているものです。

巻末には、8つの索引があります。一つは、ハンドブックに載っているすべての日本人の苗字が中国語読みで並べられています。(これは中国人と西洋人に大変役に立つのです。) 他の索引はこの書に出てくる雑誌名の漢字とかな書きによるリスト、そしてもう一つは出版社のリストです。それから、この書に掲載した学者の分野別の索引もあります。これも大変重要なもので、自分の専攻する分野に、どんな日本人学者がいるか、まだ把握していない利用者に研究方向の指針をあたえるのに役立つでしょう。

興味がございましたら、ハンドブックのはしがきをお読みください。ここには収録人名の収録過程、編集にあたって参考にした資料、使用された省略形とシンボルマークの説明、それからこの本の最大限の利用方法などがわかりやすく書かれています。

このハンドブックに対する反響には、失望しました。というのは、この書物が日本のすぐれた学問業績が示すすばらしい世界 (中国学者にとって重要であり、有用であり、かつ必要不可欠である領域) に接近するのに役立つであろうと思っていたからです。とはいえ失望したのは、この書物が批判されたためではありません。反対に、当時の数少ない書評は好意的でした。しかし、この書物は無視されました。無反響という形で一。(そして、多くの場合において、やはりこの書から利益を得ることができる日本学の研究者たちは、この本が中国だけに関係するものと思っています。) 無視された理由を理解するのは、難しくありません。この20年ぐらいの間に、アメリカや

ヨーロッパの大学院生さえも自由に中国に勉強に行けるようになりました。彼らは、まさしくこれを実行し、そして自らの研究にとって、中国語と英語の資料だけが必要と考えています。多くの場合、かれらは非常に聡明であり、常にすばらしく上手に中国語をしゃべります（たしかに私よりはるかに上手に）。しかし彼らの日本語を読解する学力は貧弱で、殆ど「ない」に等しいと言ってよいでしょう。通常、彼らの書く英語もまた、非常に多くの足らざるところを残しています。その理由はある程度、彼らが英語のルーツを学んだことがないことによります。つまりロマンス語系の言語（たとえば、ラテン語）とチュートン（ゲルマン）語系の言語（たとえば、ドイツ語）という、英語の源泉である二つの流れのいずれにも習熟していないからです。

さらに言えば、アメリカで中国学を学ぶ大学院生の多くは（大部分でないにしても）、中国から（台湾、香港、シンガポールからも）来ています。ほとんどの場合、彼らは非常に頭がよくて勤勉ですが、往々にして強い文化的偏見を身につけています。つまり彼らは、自分たちは中国人であるから、当然に欧米人や日本人が知り得るより、多くを知っていると思っているわけです。個人的には、私はこの文化的なショービニズム（中華主義の態度）、及びそれがもたらす無知と傲慢が嫌いです。

一流の中国学者になろうとすれば、日本の中国学に通暁する必要があることを知っているのは、欧米ではある場合、古参の中国学者の一部に過ぎません。しかしかれらは、学科内で、自分の専門分野における日本の研究業績を知らない、若い、或いは民族的偏見を持った教授たちに対して、数の上で、しばしば劣勢に置かれています。かくして、彼ら古参の学者も無視されることとなります。

私もアメリカの多くの日本学者（大多数ではないにしても）の態度については、愉快ではありませんが、理由は別にあります。その理由は、つまるところ、2種に落ち着きます。その第一は、（最近、多少は改善されましたが）、アメリカの日本学者の大多数が、日本人によって書かれた漢文の重要性を軽視し、まるでそれが存在しないかのように行動していることです。かれらが

そうするのは、それを読めないからです（ちょうど、欧米の中国学者が日本語を読めないために、日本語の研究業績を無視するのと同じ現象です）。大部分の欧米の日本学者は、多くても1、2年しか、中国語を勉強していません。第二の理由は、多くの日本学者—まちがいなくアメリカの日本学者の大部分は—英語以外のヨーロッパ言語の読解力を持っているかどうかを問題にするならば、せいぜい標準的レベルの半分には達していないということです。この評価は、これらの言語による何らかの文学作品を読んだかどうかという点では、とくに当たってきます。（彼らは多少、フランス語を読むことはできるでしょうが、ドイツ語はほとんどだめでしょう）。このことは、これらの言葉で書かれた研究業績を読む能力に影響するのみならず、西洋の文学や西洋の思想を知性的に語る能力にも影響します。その結果は、ある事柄の中国における背景やヨーロッパでの源泉、比較の対象となるもの、或いは機能している可能性のある類似物を知らないために、多くの欧米の学者が日本について持っているらしいビジョンの中にある島国根性と純粋日本主義につぼんとの一種の複合体ということになります。これは日本人から出てきても、かなり不愉快になりますが、欧米人から出てくるとなると、さらに受け入れがたいものになると私は思います。

もちろん、偏見はどこにでもあります。日本の中国学者の一部は、（多くの中国人中国学者と同様に）欧米人は、中国学について、ほとんど何も知らない、まして価値があることは何も言えないと思っているようです。そして、日本の日本文学の学者と学生の多くは、心理的にかれらの狭い世界の中の“我が家に住む”ことに満足しているように見えます。かれらは、多少、英語を知っているかも知れませんが、鴟外の『ファウスト』について、日本語によって書かれた学術業績の大部分が、日本文学の学者ではなく、日本のドイツ語学者によって書かれてきたという事実は、私にとって興味深いことではありますが、驚くに値しません。

鴟外の『即興詩人』に関して言えば、数年前に勘定したとき、当時私が持っていた、日本人学者37名による43篇の論文または単行書の章のうち、



鷗外の翻訳のドイツ語底本について触れているのは、わずか5篇のみであり、そのうち3篇は、他の2篇からの転用でした。(これは、誇張ではありません。ここに鷗外の『ファウスト』と『即興詩人』に関する作業中の2種の文献目録があります。ご覧にいただくために回覧します。両方とも、私がこの二つの翻訳について入手した論文を列挙してあります。『即興詩人』の文献目録は、いまや日本語のもの87篇を含むに到りました。『ファウスト』の文献目録は、2つの部分に分かれています。最初の5ページには、東アジアにおけるドイツ文学に関する総合的な論著、或いはゲーテと日本に関する総合的な論著をあげてあり、その残りのページには、鷗外の『ファウスト』についての研究が挙がっています。)

これまでお話ししてきましたことは、もちろんどれひとつをとっても、途方もなく大きな分野です。私は、それぞれのほんの限られたものしかやっております。しかし、本日示唆しましたように、一つの研究は、他の研究を導くものです。オデュッセイアの冒険航海のようなものです。

元好問の文学批評が、鍾嶸の『詩品』を導き、それは続いて「古今集序」を導きました。元好問がまた、吉川幸次郎の『元明詩概説』を導きました。

詞 *ci* に対する最初の関心が、修士論文と韋荘についての書物、李清照とフェミニスト批評についての研究を導きました。

ドイツ文学、漢文、及び翻訳への関心が、近代日本文学への愛着と結びつき、不可避的に森鷗外を導きました。

そしてさまざまな興味が、『文語ハンドブック』という著述に焦点を結びました。いかにして複雑な資料を教授し、また提示すべきか、いかにして偉大な文学作品への感興と、それらを理解し、翻訳しようとするときに起こってくる複雑性の本質を伝えるべきか。

この講演の最後の一節を読み上げる前に、私は、一つのコメントを申し上げたいと存じます。私が日本語を話す環境から離れましてから、9年がたちました。ペーパーを読み上げることは、比較的容易ですが、講演を終わってから、皆さんの質問をお受けするときに、質問を理解できない恐れがあり

ます。そこで、質問を受け、お答えする困難から免れさせていただきたいと願っている次第です。9年も日本から離れていたばかりではなく、この期間、私はアルゼンチンで3年を過ごしました。そこでは、スペイン語だけをしゃべっていたのです（というのは、私の妻はアルゼンチン人だからです）。現在の条件では、瞬間的に、私の頭脳は、異常電流が流れたときのようにショートする場合もあり得ます。というのは、最低数週間ほど会話に入り浸らないと、会話のスキルをブラッシュアップすることはできないからです。このため今日は、この東大中文の卒業生である専修大学教授の廣瀬玲子先生が、ご親切にも、皆様のご質問を英語に、私のお答えを日本語に通訳する役目を引きうけてくださいました。それと同時に、私に対する直接の質問だけでなく、本日私が議論したトピックについて、皆様ご自身の間でも、意見を交換してくださることを歓迎いたします。

最後に、この個人的なノートを終わりにするにあたって、一言付け加えますと、私が東洋文庫の講座に出席した最後の機会は、藤枝晃氏が敦煌研究について講演した1986年でした。私は、その15年前に京都で彼と知りあっていましたが、彼からその翌日の昼食に誘われたときは、たいへん驚いたものでした。

ああ、なつかしい！ 今、京都を思い出すと、それは、一場の夢です。

あの時は、なんと幸運であったことか、小川環樹先生の蘇軾 Sū Shi の授業に出席できたこと、入矢義高先生の中国文学についての学部授業を傍聴できたこと、小栗英一先生の元好問の集中講義に出席できたこと、杜甫に関する私的なクラスのために、近衛会館で毎週、吉川先生にお会いできたこと、また一週おきに、吉川先生と羽田会館で先生の本の翻訳のチェックのためにお会いできたこと。まだ他にも楽しい思い出はあります。研究室で田中謙二先生と私的な対話を交わしたこと、スナック白樺で吉田富夫氏と時々ウィスキーを飲み交わし、入矢先生さえ一度そこへお連れしたこと、京都を去るとき、礪波護、寛文生両先生に哲学の道に沿った蕎麦屋に招待されたこと、それはあまりにも特別なことでしたので、今思いだすのは、苦しいくらいで

す。

しかし、それ以後、新しい結びつきが生じました。新たに加えられた友人との歓迎すべき関係です。田仲一成先生と知り合ってから、今年で25年になります。そして戸倉先生と藤井省三先生とは、10年になります。この方々の親切には、深く感謝しております。それは楽しいことであり、また楽しいという以上のものであり、いわば「光栄」というべきものです。

そして、友人のことについて語ろうとすると…、忘れがたい人が、ほかに二人います。この東大で、私は彼ら二人を訪れます。向こうの池の畔にいる三四郎と、無縁坂に沿ったところにいる鷗外です。

帰ってきて、ほんとうによかったです。

ご静聴、ありがとうございました。

#### 【後記】

ジョン・ティモシー・ウィクステード (John Timothy Wixted) 教授は、1942年生れ、オックスフォード大学で博士学位を取得された後、アリゾナ州立大学アジア言語学科で日本語日本文学と、中国語中国文学の指導に当たった。2004年退職し同大名誉教授。1999年8月より1年間、国際交流基金の援助を受け来日、外国人研究員として中文研究室に滞在し、森鷗外の研究に従事された。その折行われた講演は、中文研究室紀要4号に掲載されている。今回は(財)東洋文庫の招請により2009年2月15日から28日まで来日、ここに収録したのは、2月18日、(財)東洋文庫と東大中文研究室の共催により、東大赤門総合研究棟849教室において行われた講演の記録である。講演は、東京大学名誉教授田仲一成氏が日本語に翻訳した原稿を、ウィクステード教授が読み上げる形で行われた。講演の中にもあるように、終了後の質疑応答では、専修大学教授廣瀬玲子氏が通訳を勤めた。ウィクステード教授の主要な著作は次のとおりである。(戸倉英美記)

(著書)

*A Handbook to Classical Japanese* / 文語ハンドブック (Ithaca, N.Y.: Cornell East Asia Series, 2006).

*Japanese Scholars of China: A Bibliographical Handbook* / 日本の中国学専門家ハンドブック (Lewiston, N.Y.: The Edwin Mellen Press, 1992).

Translation of Yoshikawa Kōjirō 吉川幸次郎, *Five Hundred Years of Chinese Poetry, 1150–1650: The Chin, Yuan, and Ming Dynasties* [元明詩概説] (Princeton: Princeton University Press, 1989).

*Poems on Poetry: Literary Criticism by Yuan Hao-wen (1190–1257)* [元好問の文學批評] (Wiesbaden: Franz Steiner, 1982; rpt. Taipei: Southern Materials Center, 1985).

*The Song–Poetry of Wei Chuang (836–910 A.D.)* [韋莊之詞] (Tempe: Center for Asian Studies, Arizona State University, 1979; rpt. 1991).

(本講演に関係する論文)

“*Shipin* 詩品 (Poetry Gradings) by Zhong Rong 鍾嶸 (469?–518),” in *Six Dynasties Sources*, Albert E. Dien, ed. (forthcoming), 29 MS pp.

中国文学及び日本文学：一西洋人の研究方法について，中国語中国文学研究室紀要 4 (Apr. 2001), pp. 47–65.

“The Poetry of Li Ch’ing-chao [李清照]: A Woman Author and Women’s Authorship,” in *Voices of the Song Lyric in China*, ed. Pauline Yu (Berkeley: University of California Press, 1994), pp. 145–168.

“The Nature of Evaluation in the Shih-p’ in (Gradings of Poets) by Chung Hung (A.D. 469–518),” in *Theories of the Arts in China*, Susan Bush and Christian Murck, eds. (Princeton: Princeton University Press, 1983), pp. 225–264.

“The *Kokinshū* Prefaces: Another Perspective,” *Harvard Journal of Asiatic Studies* 43.1 (June 1983), pp. 215–238.

*Ibid.* Reprinted, with the same title, in *Classical and Medieval Literature Criticism: Excerpts from Criticism of the Works of World Authors from Classical Antiquity through the Fourteenth Century, from the First Appraisals to Current Evaluations*, Volume 29, ed. Jelena O. Krstović (Detroit: Gale Research, 1999), pp. 245–258.

“A Finding List for Chinese, Japanese, and Western–Language Annotation to and Translation of Poetry by Yüan Hao-wen [元好問],” *Bulletin of Sung–Yüan Studies* 17 (1981), pp. 140–185.